

新昭和  
選和  
碑法帖大觀

第一輯第三卷

300-44



•1200501366955•



始



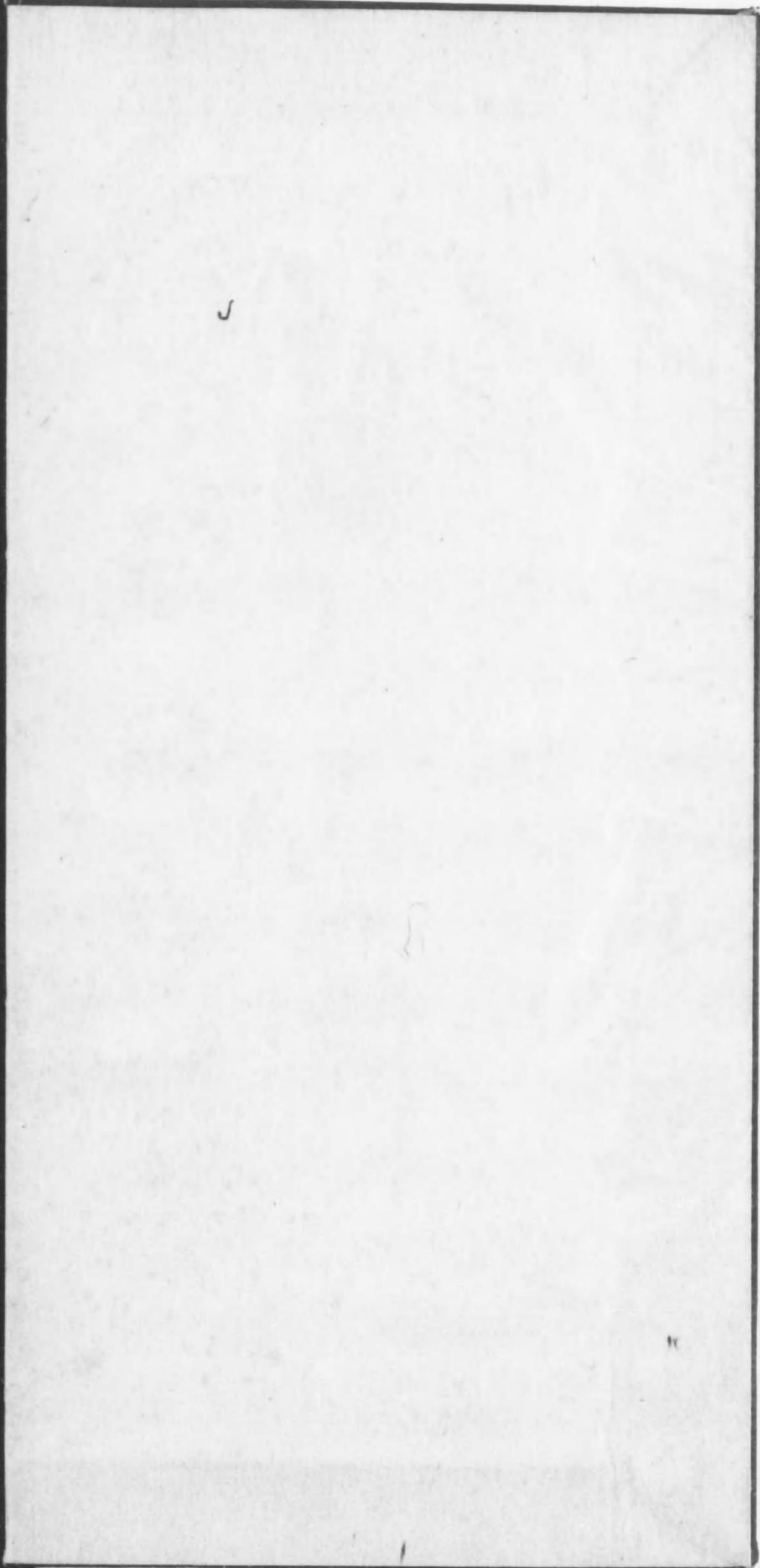
561

興福寺斷碑

附蘭亭二種



2



新昭  
運味  
碑  
法  
帖  
大  
觀



卷 輯

興福山又斷碑



碑在京興福寺  
崇位  
人雅集  
右軍將軍王羲之



之行書勒上  
也肇自石樓東鎮  
守封司地之班金  
冊西符啓命將軍

之秩所師中尉  
南宮之其或瞻  
對如鐵檢際明霜  
酌裁豹之神韜之

守名溢寰海功揮  
動植其誰由然哉  
惟大將軍矣公詳  
文字寸天夫行內

紹事父官  
皇朝金紫光祿大  
夫行內常侍七紹  
之德是使金鋪接

度玉璽承官長載  
榮於司宮高門聽  
於寺伯公推扁就  
於孫年量轉奇

規美節裁於推豈  
源之乎鵬之為鳥  
不飛法勵己荷公  
不私補過愕愕於

官閑匪懈  
旋旋於  
夙夜勞  
按公以秩  
授公文林郎  
適舉  
從班也  
公謹  
寒居

此能道  
元濟旨  
問之  
費外  
公而何  
冬十  
二月  
又制  
搏公  
右監  
門衛  
大





將軍建宸神龍  
三年又制舉公  
鎮軍大將軍行右  
監門衛社因以鉞

交衛霍擁衝田寧  
橫玉帛步於朱軒  
跪執頌於青  
祿敢對敬  
天之

子之傳命也唐元  
年之制進封  
二冊三階應曆  
命騰遷持大義而

不可奪條元動而  
為其有則皇  
上欽服心之寄也  
公平均七政恭踐

五朝樹德務滋伯  
躬以脩乃奏乞辭  
骨身歸常樂  
許公焉尚書謝病

非無給  
之苗難  
收百年之卷  
長沙之憤結  
康鵬

呼維公開國承祀  
正家崇袂葉嗣傳  
於紫然鼎胄曳於  
黃雲元戎魚之行

乎大壑其量府也黃  
金白玉兮滿君之  
北堂其賓賢也虬  
風軌物樂臣飛將

其在公乎夫人恒  
國李氏圓潔替月  
潤瞻呈花  
十一月十二日先

公而殯公  
九年十月廿三日  
循空  
雞鳴而春不曉

犬吠而狝以暮塵  
將軍於地下意氣  
附於平生窳帳殊  
於寔窳則公夫人

之願命願不令於  
雙棺焉於識大夫  
行內常侍上柱國  
安行明恭鑿俗謹

身子云道元方長子  
高行內內傑局承  
上柱國昇行及庶  
塵滓用心大乘出

俗細之三災迴迴迹  
局承騎都尉安昂  
壽三痛切天悲  
銜骨血誰復命庭

花筭聽五急詞騰  
七步王公在助  
聖主所知夢門  
而出飛屈五神出

自天秀蓋非常人  
漢神田已依仁立  
身舉圖橫海公乎  
動翰有珪詩徽益




子相舉之稽南山  
之青岬之其齋西  
山之照不意全伯  
銘金穎川故事通

揚德晉杏杏藤擲  
青青柏林旌勳表  
頌孝子林郎直將  
作監徐思忠壽刻字

奴	張
上	金
進	界
蘭	
亭	
序	

秋  
碧  
堂  
本

善提像一鋪居士張  
夏造



永和九年歲在癸丑暮春之初會  
于會稽山陰之蘭亭脩禊事  
也羣賢畢至少長咸集此地  
有峻領茂林脩竹又有清流激

湍暎帶左右引以為流觴曲水  
列坐其次雖無絲竹管絃之  
盛一觴一詠足以暢叙幽情  
是日也天朗氣清惠風和暢仰  
觀宇宙之大俯察品類之盛

所以遊目騁懷足以極視聽之  
娛信可樂也夫人之相與俯仰  
一世或取諸懷抱悟言一室之內  
或因寄所託放浪形骸之外雖  
趣舍萬殊靜躁不同當其欣

於所遇暫得於己快然自足不  
知老之將至及其所之既倦情  
隨事遷感慨係之矣向之所  
欣俛仰之間以為陳迹猶不  
能不以此之興懷况脩短隨化終

期於盡古人云死生亦大矣豈  
不痛哉每攬昔人興感之由  
若合一契未嘗不臨文嗟悼不  
能喻之於懷固知一死生為虛  
誕齊彭殤為妄作後之視今

六由今之視昔  
一悲夫故列  
叙時人錄其所述  
雖世殊事  
異所以興懷其致一也  
後之攬  
者亦將有感於斯文



臣張金界奴上進

神	本
龍	蘭
羊	亭
邑	序

永和九年歲在癸丑暮春之初會  
于會稽山陰之蘭亭脩禊事  
也羣賢畢至少長咸集此地  
崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍

湍映帶左右引以為流觴曲水  
列坐其次雖無絲竹管弦之  
盛一觴一詠一足以暢叙幽情  
是日也天朗氣清惠風和暢仰  
觀宇宙之大俯察品類之盛

所以遊目騁懷足以極視聽之  
娛信可樂也夫人之相與俯仰  
一世或取諸懷抱悟言一室之內  
或因寄所託放浪形骸之外雖  
趣舍萬殊靜躁不同當其欣  
貞觀  
賞  
謝靈運



於所遇難得於已快然自足不  
知老之將至及其所之既倦情  
隨事遷感慨係之矣南之  
欣俛仰之間以為陳迹猶不  
能以之興懷况脩短隨化終

期於盡古人云死生亦大矣豈  
不痛哉每攬昔人興廢之由  
若合一契未嘗不臨文嗟悼不  
能喻之於懷固知一死生為虛  
誕齊彭殤為妄作後之視今



興福寺斷碑解說

唐時代に僧大雅が王羲之の筆蹟を集字したもので、明の萬曆の末に西安城の濠で得たものである、三十五行よりなり、内三行は文字が無くなつてゐる。己に上半は亡失して下半だけが存してゐる。故に俗に半截碑と稱し興福寺斷碑と稱するものも、碑が興福寺に在つて而かも半截されてゐるが爲めである。第二十行目の四字が未泐なるものを以て、舊拓本の證查となつてゐる。

王羲之は書聖として歴代數千年來の書道の王者といつてもよい。殊に行草に到つては全く他の追隨を許さざる所である。王羲之の集字として今に存するものに、聖教序とこの興福寺斷碑の二者が最も有名である。聖教序はその集字の法頗る妙を得て、よく羲之の形貌を得てゐるに反し、この斷碑の方は彫鏤や、粗雜に失して、碑亦缺損多く、その形模の点より見れば、大分軒輊のある様にも見えるが、詳さに之を熟覽すれば、筆力頗る雄勁にして結體亦勁緊、聖教序に見得られぬ特逸性をもつたものである。殊に脈絡、字體前後の連絡などは、よく一貫して一見集字とは思へぬ箇所が數多發見出來得るのである。或は、一旦集字したものを再び臨書したものではあるまいかとも思へるのである。

行書の規矩を得んとすれば、羲之に求むるより外にない。而して羲之の行書として石に残るものは、聖教序とこの興福寺斷碑より外にない。この碑の行書研究的價値の偉大なる所以も亦茲に存するのである。

## 蘭亭序解説

書道を學ぶもので蘭亭を究めないものはない。言は、蘭亭序は、書道研究の經典といつても過言ではなからう。書聖王羲之の筆蹟中でも最も特逸したもので、羲之といへば蘭亭を聯想し、蘭亭を見ては羲之の面目を想起するといふ位有名なものである。然しこの蘭亭の眞蹟は太宗皇帝の昭陵に殉じたものであるから、後世再び之を見ることが出来得ないものである。現存するものは皆太宗の命によつて摸搨され、諸王太夫人に與へられたものが後に遺存したものである。有名であるだけ後世に傳はつた種類が多く、其數幾百を以て數へられない程あるものである。

これを大別して、虞世南の摸搨にかゝるものとされてゐる張金界奴上進蘭亭と、歐陽詢の摸搨にかゝる定武蘭亭と、褚遂良の摸搨と稱せられる神龍本蘭亭の三者を以て、世に最も重んぜられ賞揚されてゐる譯である。

定武本は精采品格に於いて勝れ、褚搨本は筆意筆致の精妙さを以て優り、張金界本は骨力風貌を以て勝るといふ風で、一長一短各その面目を異にしてゐるものである。

書道研究家として手習の方面から見れば、張金界奴上進蘭亭又は神龍半印本蘭亭などは、最も規範的法帖として、理想的なものであつて、行書規範と稱しても誇大の言ではあるまい。

帖の首尾に神龍の半印があるので神龍半印本蘭亭と稱し、帖の終りに「張金界奴上進」とあるを以つて張金界奴上進蘭亭と稱せられてゐる。

張金界本蘭亭は餘清齋、秋碧堂の二集帖に輯刻されてゐて、世に公刊されてゐるものは餘清齋本が多い。本大觀中のものは秋

碧堂本で、稍趣の異つた所のあるものである。

### 王羲之略傳

王羲之字は逸少、司徒王導の從子なり。晋代に右軍將軍會稽内史と爲る。嘗て同志と會稽山陰の蘭亭に宴集し、羲之自ら序を作る。蘭亭序即ちこれなり。毎に自ら稱す。我書種孫に比すれば當に抗行すべし。張芝の草に比すれば猶當に雁行すべしと。嘗て人に書を與へて言ふ。張芝は池に臨んで書を學び、池水盡く墨し。人をして之に耽ること是の如くならしめば未だ必ずしも之に後れずと、羲之の書初め庚翼、嘉情に勝れず、暮年方に妙なり。

羲之幼少衛夫人の書を學び、將に能書を以つて自負せしが、江を渡りて名山に遊び、李斯、曹喜等の字を見又許下にゆきて鍾繇、梁鵠の書を見、洛下にゆきて蔡邕の石經三體書を見、初めて衛夫人の書を學び、徒らに年月を費せるを知り、遂に志を改めて衆碑を師となし、晚年書法の妙境を悟入し、後世書聖を以て任せらる。その傳はる書蹟多し。楷書に樂毅論、黃庭經、東方朔畫贊等あり。行書に蘭亭叙、聖教序（懷仁集字）興福寺斷碑（大雅集字）草書に十七帖等あり。又尺牘として傳はるものに双鉤本としては、十七日喪亂帖、游目帖、快雪時晴帖、平復帖等あり、歷代集帖中に輯刻されたるもの亦枚舉に遑あらず。

## 興福寺斷碑釋文

碑は僅に下半を存するのみ。故に文句連續せずして釋文を施し難し。

缺碑在京興福寺陪常住。大雅集晋右軍將軍王羲之行書勅上。也肇自石樓東鎮守封司地之班金册西符啓命將軍之祿（我の祿）雖。師中尉摠南宮之禁其或膽剛如鐵操緊明霜酌龍豹神轄。策名溢寰海功坤動植其誰由然哉惟大將軍吳公諱文字才。夫行內給事父節。皇朝金紫光祿大夫行內常侍七貂。之德是使金鋪接慶玉璽承官長戟榮。啓之異文於司宮高門聯於寺伯公。雅局就於孩年量轉奇規英斷裁於稚齒源之乎鵬之爲鳥

不飛缺法勳已荷公不私補過愕愕於宮闈匪懈兢兢於夙夜缺勞撫公以秩授公文林耶適舉從班也公謹密居體謙光潛旨問缺之賞非公而何冬十二月又缺制轉公右監門衛大將軍建缺宸神龍三年又缺制舉公鎮軍大將軍行右監門衛缺社固以鋒交衛霍權衝田寶橫帶缺步於朱軒缺龍顏於青缺土之祿敢對缺啟缺天子之休命也唐元年又缺制進封缺之册三階應歷八命騰遷持大義而不可奪缺保元勳而若無有則缺皇上欽腹心之寄也公平均七政恭踐五朝樹德務滋缺成脩乃奏乞骸骨身歸常樂缺詔許公焉尙書謝病非無給缺彩窺四序之留難秋蓬飄飛收百年之卷促賈長沙之憤結庚鷓缺呼維公開國承祉正家崇秩葉嗣傳於紫緘冊胄曳於黃雲元戎缺魚之行乎大壑其量府也黃金白玉兮滿君之北堂其寶賢也虬缺風軌物傑臣飛將其在公乎夫人恒國李氏圓姿替月潤臉呈花缺七年十一月十二日先公而殯公以開元九年十月廿三日循窆紙缺落落松扇金雞鳴而春不曉玉犬吠而秋以暮慶將軍於地下意氣缺臥於平生窗帳殊於窈窕則夫人之顧命願不合於雙棺焉於缺議大夫行內常侍上柱國處行明姿鑒俗謹身從道元方長子高缺耶行內僕局丞上柱國昇行及厥塵滓開心大乘出俗網之三災缺庭局丞騎都尉處昂等並痛切終天悲銜毗血雖復合庭花萼聯缺五色詞騰七步王公在缺聖主承知夢八門而出飛缺神出自天秀蓋非常人復禮由己依仁立身舉圖橫海公乎動鱗缺有珪詩徵孟子相舉王稽南山之壽嶠立共齊西山之照不意全缺伯銘金穎川故事遵揚德音杳杳藤柳青青栢林表勳旌頌孝子缺林耶直將作監徐思忠等刻字

菩提像一鋪

居士張愛造

### 晉王右軍蘭亭序釋

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭修禊事也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林修竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外雖趣舍萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情隨事遷感慨係之矣向之所欣俛仰之間以為陳迹猶不能不以之興懷況修短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每覽昔人興感之由若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喻之於懷固知一死生爲虛誕齊彭殤爲妄作後之視之亦由今之視昔悲夫故列叙時人錄其所述雖世殊事異所以興懷其致一也後之覽者亦將有感於斯文



有所權取

昭和十年三月十日印刷  
昭和十年三月十五日發行

昭和碑法帖大觀第一輯第二卷  
附送 興福寺斷碑 附蘭亭二種

發行所 寧樂書道會  
地址 東京市神田區  
電話 一三三二番

印刷所 玉木印刷所  
地址 東京市神田區  
電話 二五三番

印刷人 玉木源郎

終